

「洗礼者ヨハネとイエス」という小標題が掲げられます。10章の派遣物語は11章1節の繋ぎを以て終了し、本日の2節からは新しい単元に入ってゆきます。この11章2節から12章50節は「イエスとは誰か」という問いと答えが、ユダヤ教指導者との対立を通して、マタイは明らかにしてゆきます。それは「イエスとはキリストである」という革新的な問題提起だったのです。

本日の箇所は洗礼者ヨハネがイエスとは誰なのかを尋ねる質問で始まります。この問いに対してイエスは直接答えるのではなく、彼の働きの数々をあげ、事実を以て判断するようにと求めます。しかし、事実をありのままに認めることほど難しいことはないのです。ですからマタイは「わたしにつまづかない人は幸いである」(6)と付け加えざるを得ませんでした。それは当時の初代教会が宣べ伝える福音を、誤解どころか最初から敵愾心を持って妨害する者たちが多くいたからに他なりません。こうして教会が福音を宣べ伝えれば伝えるほど、敵対者との対立はますます深まっていったのです。

当時ヨハネは死海の東岸から6キロの山頂に造られた堅固なマケルス要塞の牢に閉じ込められていました。だからたとえ弟子を使ったとしても、外部との接触は不可能だったと考えられます。ですからこの記事はおそらくヨハネ宗団と初代教会の間でなされた論争なのでしょう。ここでは初代教会外の潜在権力、つまりヨハネの側からイエスの本性を問わせ、それに対してイエス自らが自分こそがメシアであることをはっきりと宣言する方法が採用されています。外部の問いによって自らを確認するというこの方法はキリスト論的弁証といって当時の教会が好んで用いました。

2節の「キリストのなされたこと」はマタイのオリジナル記事です。マタイはここまでのイエスの全行為をあらためて「キリスト」の行為と規定します。その行為の事実は5節に集約されます。病める者、貧しい者への救いの行為と言葉はすでに神の国が開始されたことを物語ります。どのような思想や呼び名よりもこの事実こそが決定的であるとマタイは強調するのです。この5節の告白こそが初代教会の働きを福音たらしめる唯一の証言なのです。そしてこれが神の知恵、つまりキリストであると語るのです(1 コリ1;21,24)。

17節の追加文は子どもの遊び唄です。結婚式ごっこと葬式ごっこに意見が分かれてどちらにも参加しないといういさかいの唄です。これはヨハネとイエスという異なった二つのタイプによって語られた神の最終的な言葉を人々が無視したことへの批判です。ヨハネ宗団の禁欲的な悔い改めの道にも初代教会の自由な交わりの道(5節の内容)にも参加しない宗教的特権者への批判です。

考えずにすむのならそのままにし、どうにもならなくなってやおら考え出すのがわたしたちかも知れません。これは怠慢ではなく、考えるとは本来そういうものだからでしょう。そうであるにもかかわらず、筋を通すことだけを頼りに考えを進める場合があります。確かに整った考えが出来るでしょう。しかし、そこには従わせるという自己目的追求がはびこります。生きることから離れた人生解釈が付きまとうのです。マタイはただ「キリストのなされたこと」を行いなさいと勧告するのです。その行為と言葉がわたしたちを新しい考える場へと押し出すのです。